

越境する日本人の教育戦略 —グアムと日本を移動する「教育移民」に着目して—

芝野 淳一

(人間科学研究科 教育文化学 D1)

1. 問題設定

近年、日本において子どもを比較的早い時期に英語圏の国々へ留学させる親が散見されるようになってきている。この現象は「早期海外留学」あるいは「親子留学」と呼ばれ、雑誌やインターネットなどで取り上げられることが多くなっている（例えば、週刊ダイヤモンド 2011, 8月）。「鉄は熱いうちに打て」と言わんばかりに、できるだけ早期に英語圏の国々に子どもを送り込み、英語力の向上や異文化に「慣れさせる」ことをねらう親の動向は、グローバル社会を見据えた教育戦略であるといえよう。

他方、海外の研究に目を向けると、1990年代後半から中国、台湾、韓国といった東アジア諸国における「教育のために移動する家族」を取り上げた調査が蓄積されている。これらの研究では、経済グローバル化の進展と教育達成をめぐる競争の激化に影響され、子どもたちの教育達成のためにトランスナショナルな移動を行う家族の姿が描かれてきた。このような家族は、グローバルなアリーナにおいて教育戦略を駆使し、自らの階層的地位の再生産を試みる。このような戦略のもと育てられる子どもたちは、本国あるいは移動先において教育達成・地位達成を目指す。こういった戦略を駆使する／できる家族は、“Transnational Capitalist Class” (Sklair 2000) としばしば称される。

またその一方で、「教育のための移動」は、特異な家族形態を生み出していることも明らかにされている。早期海外留学は、基本的に母親と子どもが海外へ移動し、父親が本国で働き送金するという形か、子どものみを海外へ移動させる形をとる。こうした「トランスナショナルな家族」という家族のあり方は、「核家族」という近代の家族形態の自明性の問い直しを迫るものである。グローバゼーションの圧力のなかで、「教育」をめぐるトランスナショナルな移動が行われると同時に、それに伴う家族形態の変容が起こっているのである。

上述したような状況があるにもかかわらず、これまで日本の教育戦略研究はもっぱら「国内」に限定して議論を展開してきた。上述した研究からも示唆できるように、日本における家族の教育戦略はグローバルなアリーナへと移行しつつあり、もはや「国内」を前提とした枠組みのみでは捉えられない。既存の枠組みを問い直す試みとして、未だ手つかずの状態である「早期留学」や「親子留学」といった「トランスナショナルな教育戦略」(Waters 2005)の実態を明らかにすることは、現代日本の家族と教育の関係を読み解くうえで必要不可欠であると考えられる。

一体なぜ家族はこのような教育戦略をとったのか、また実際に留学した家族はどのような生活を送っているのか。本研究では、「トランスナショナルな教育戦略」を打ち立てる人々を「教育移民」を称し、上述の問いをもとに、グローバル化時代における家族の教育戦略について検討する。

2. 調査概要

調査の場所としてグアム島を選定した。その理由は、日本から最も近い英語圏であること、比較的日本人がほぼ一箇所に集住しており調査を進めるにあたり有利であること、リゾート地であり教育水準が

アメリカ本土・イギリス・オーストラリアほど高くない場所であること、これまでグアムを舞台にした研究がないことの4つである。グアムには、2012年2月3日から28日まで滞在し、調査を進めた。

調査は、教育のために移動する「教育移民」へのインテンシブな聞き取りを中心に進めた。対象者は、すべて経営者・自営業者であり、経済的に余裕のある家族であり、1名を除いてすべて大卒の学歴を取得していた。2名（家族）を除き、すべて母親と子ども、あるいは子どものみでグアムに滞在していた。

また、「教育移民」に対する聞き取りに加え、補完的な調査として、移動形態が異なる日本人家族の聞き取りを行った。その理由は、「教育移民」の事例を相対的・多角的に捉えるためである。インタビューの詳細は以下の表の通りである。

移動形態		母親	父親	子ども	計
自発的	教育移民	8	1	6	15
	ライフスタイル移民	4	3	0	7
非自発的	駐在	4	0	0	4

さらに、かれらの日常生活やグアムの教育・生活事情に関する情報を得るために、グアム日本人学校・補習校への5日間のフィールドワークおよび管理職へのインタビュー、日本人会と在ハガニャ総領事館への訪問、グアム大学語学学校（母親がVisaを取得するために留学する学校）への訪問、子どもが通う現地の私立学校2校への訪問を行った。

また、「飲み会」への参加、通訳のお手伝い、子どもの送り迎えの付き添い、家庭教師、教会への出席、ブログやメール、SNSでのやり取りなど、インフォーマルな「お付き合い」にも出来る限り関わり、彼らのグアムでの日常生活を捉える手がかりとした。

3. 調査結果

ここでは、インタビューをした15名の中から、保護者3名、子ども2名の事例をピックアップし、多様なトランスナショナルな教育戦略の様相を報告する。具体的な分析結果・データは発表時に提出する。

4. 参考文献

週刊ダイヤモンド, 2011, 8月号。

Sklair, L. 2000, *The Transnational Capitalist Class.*, Oxford: Blackwell.

Waters, J.L. 2005, "Transnational Family Strategies and Education in the Contemporary Chinese Diaspora", *Global Networks*, 5, 359-378.